

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2019 春号 **86**

公益財団法人 和歌山県文化財センター



特集 熊野地方における文化財建造物の修理について



写真上：竣工した那智山青岸渡寺の屋根（左奥は熊野那智大社の社殿群）

写真左：同上、熊野那智大社側から見る

写真右：竣工した熊野那智大社拜殿

特集 熊野地方における文化財建造物の修理について

一、はじめに

和歌山県の南部、熊野地方では、平成十四～十六年度に実施された熊野那智大社での保存修理事業以降、熊野本宮大社（同二十二～二十六年、本誌55・61・64号参照）の境内をはじめ、高原熊野神社（同二十八年、同76号参照）、継桜王子跡（同二十六～二十八年、同71・78号参照）や切目王子跡（同二十八年度、同79号参照）の社殿など、熊野古道沿いに残る王子社でも屋根葺替などの維持修理が続いて来ました。その間には、平成十六年七月「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録（同二十八年には追加登録も）され、翌十七年度の市町村合併など行政的に大きな動きもありました。「紀伊山地の霊場」とは、真言密教の根本道場である「高野山」と、自然崇拜に起源をもつ3神（速玉・那智・本宮）が鎮座する「熊野三山」、修験道の本山・行場である「吉野・大峯」で形成する霊場を指します。「紀伊山地の参詣道」は、熊野三山への参詣道のうち、和歌山県内の大

辺路・中辺路・小辺路より成る3つのルートに、伊勢神宮（三重県）からの伊勢路と、吉野（奈良県）から本宮への修行道である大峯奥駈道を加えた参詣道の総称です。高野山町石道を除く参詣道は一般に「熊野古道」とも呼ばれます。熊野那智大社の隣りには西国三十三所巡礼の第1番札所、那智山青岸渡寺が並び立ちます。その景観は「神仏習合」といって、神と仏をともに大切に信仰して来た日本人の生き方、考え方を現在によく伝えてくれています（表紙写真）。ところで、熊野古道の他にもう1つ、同じ「道」としての世界遺産があります。関西国際空港などに置かれる冊子には「日の昇る国から日の沈む国・・・」と、小学校で習った様な文面が紹介されています。実は、キリスト教世界の巡礼路（スペイン・フランスなど）のことで、世界でも2つしか登録がない巡礼路（非参詣道）として、姉妹道になっています。関西圏だとあまり意識されませんが、国内だけでなく国際的にも注目の「道」であって、今も昔も人が歩きたくなる神秘的な場所なのです。

話を戻して、平成二十三年九月の紀伊半島大水害で熊野地方は大きな被害を受けて、熊野那智大社では同年から翌二十四年度に災害復旧事業が行われました。同じように、熊野三山の信仰が成立する平安時代以降、その歴史や伝統の結晶でもある建物は、大雨などにより幾度も被害を受けながら、中世、近世、そして近代からは文化財としても、守り継がれて来ました。大辺路では、浜の宮王子跡の社殿（国史跡）の整備事業が予定されており、今後変わらざる保存や保全は続いていくでしょう。本号では、平成二十九～三十年度に、那智山青岸渡寺と熊野那智大社で進めて来た2つの事業を取り上げ、その建物や修理について紹介します。



写真1. 修理前の本堂（全景）

屋根面の下方に点在する黒く変色した部分は、こけら板の腐朽・破損が進行した箇所です。軒先の近くでは雨水の流量が多くなるため、こけら板が脱落・飛散して下地が露出する程に屋根面が傷んだ箇所が点在し、トタン板で覆って雨漏りを応急的に防いだ状態にありました（写真5）。

二、那智山青岸渡寺本堂の保存修理

那智山青岸渡寺の本堂は、如意輪観世音菩薩を本尊とする、正面の柱間が9間、側面の柱間も9間の大きな建物です。天正九年（1581）の兵火で焼失しますが、天正十八年（1590）には豊臣秀吉公によって再建されました。それから140余年が経った享保十八年（1733）から翌十九年には、柱や虹梁などの部材を取り替えるほどの、大規模な修理があったと伝わりまします。これは、紀州藩第5代藩主から8代將軍となった、徳川吉宗公の政権期に当たります。明治三十七年（1904）、特別保護建造物（現在の重要文化財）に指定されました。

本堂の屋根は、入母屋造という形式で、「こけら板」と呼ぶ厚さ3〜5mmの木製の薄板を使って葺かれています。「こけら板」で葺くから「こけら葺き」。板の幅が10〜15cm、長さが30〜36cmのこけら板を3cmずつ上にずらしながら並べ止めて行くので、屋根としてどの部分もこけら板が10〜12枚重なっている形となります（写真2）。面積が1,000㎡を超える屋根を葺くのに、約27万枚のこけら板を使用します。

大正十四年（1925）に半解体修理という比較的大規模な修理が行われた後は、昭和三十七年、同六十二年、平成十八年と

3回の屋根葺替修理が行われて来ました。

平成二十九年十月には台風による豪雨を受けて、屋根の傷み具合が軒先周辺で目立ち始めました。傷みのひどい部分では強風等でこけら板の脱落や飛散も起こり、下地の木部が露出して雨漏りが生じるまで、破損が進んでいました。そのため、災害復旧事業として屋根葺替修理工事を行うことになりました。

工事はまず、仮設工事として素屋根という覆屋で建物を包み込んで、参拝者の安全を確保し（写真3）、その上方で屋根の葺替や下地など木部の補修作業を、平成三十年五月から十一月にかけて行いました（写真5〜8）。最後に覆屋を解体、十二月に事業を終えました（表紙・写真4）。

今回の屋根葺替修理では、近年の台風や集中豪雨の影響も想定しながら、こけら板の仕様（材料や使い方など）について、過去の修理内容やその成績を確認・整理した結果、大正十四年修理の仕様に準じた施工を選択することにしました（表1）。以下に検討の過程を少し解説します。



写真2. 「こけら葺き」の仕様

小舞（こまい）と称する下地へ、長さ36cmの「こけら板」を3cmずつ上へずらし並べて、竹釘で止めながら葺き上げていきます。板の防腐効果を図って、板の間には銅板を挿入しています。



写真3. 素屋根の建設中の様子



写真4. 修理後の本堂（全景） 写真1と同じ位置から撮影。

大正十四年修理の仕様をみると、屋根面の強さ（雨風への耐久性）は板の厚みに左右され、板を止めていた銅釘の効果（緑青による防腐作用）も有効か。ただ、板を厚くし過ぎると屋根の曲線が小さく（直線的に）なって、外觀の雰囲気も変わってしまう。それを實現するためには、健全な小屋組（屋根の骨組）を改造する必要が生じて、修理方針から見直すことになる。文化庁との協議を経て実施では、板の厚さや長さを小屋組に影響の出ない範囲で可能な限り大きく、銅釘に代わる銅板を多めに挿入して、雨風に対抗させる方法を採用しました。

また、戦後、こけら板の材料は、スギからサワラが全国的に主流となりましたが、近年はサワラの供給量減とともにスギへの着目・回帰も進んで来ています。紀伊山地の一部である熊野地方にとっては自然な流れでもあり、今回の材料も吉野杉で賄うことができました。

今年（かんねん）は観音霊場草創1,300年の節目の年になります。熊野那智大社の社殿とともに、これからも参詣者を迎える霊場として、また、その歴史や伝統を内包する建物として、受け継がれていくことでしょう。（下津健太郎）

表1. 那智山青岸渡寺本堂における大正修理以降の「こけら葺き」仕様の変遷（最下段は今回修理での実施仕様）

修理を実施した年		次の修理までの期間（年数）	こけら板の仕様						備考 （板の防腐対策など）	
元号	西暦		板の材種	厚さ（mm）	長さ（cm）	板の重なり具合（枚）				板の止め釘
						向栞	軒先	上方		
大正 14 年	(1925)	37 年	杉（スギ）	4.5	30	12 枚	12 枚	10~8 枚	銅鋲釘	銅釘の緑青発錆に期待か
昭和 37 年	(1962)	25 年	榎（サワラ）	3~3.5	30	15 枚	12 枚	10 枚	竹釘	8 段ごとに銅板を挿入
昭和 62 年	(1987)	19 年	榎（サワラ）	3	30/36	12 枚	10 枚	10 枚	竹釘	10 段ごとに銅板を挿入
平成 18 年	(2006)	12 年	杉（スギ）	2.5~3	30/36	12 枚	12 枚	10 枚	竹釘	10 段ごとに銅板を挿入
平成 30 年	(2018)	—	杉（スギ）	4.5~5	30/36	12 枚	12 枚	10 枚	竹釘	4~6 段ごとに銅板を挿入

こけら葺きの葺替周期は通常 20 ~ 25 年とされ、戦争期を挟んだことを考慮しても好成績と言えそうでした。



写真6. 向栞での屋根下地補修の様子

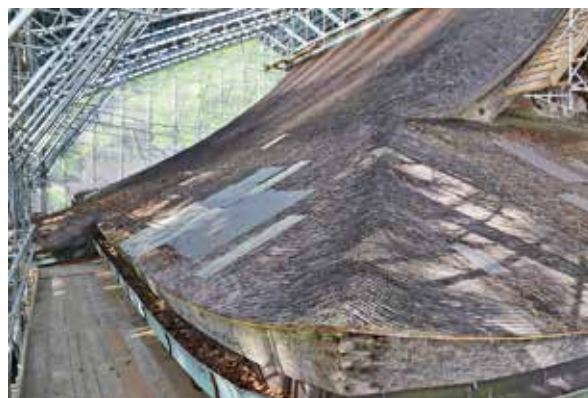


写真5. 修理前の屋根面の破損状況



写真7. 隅部分でのこけら葺きの様子



写真8. こけら葺き施工中の屋根面

熊野那智大社の境内施設整備事業

熊野那智大社は、熊野速玉大社・熊野本宮大社とともに熊野三山と呼ばれ、熊野信仰の中心の一つです。境内は西の奥に本殿を5棟並べ、矩折に八社殿と御県彦社を配置し、拝殿・舞殿・幣殿が第四殿・第三殿の前に建っています。本殿は嘉永四年（1851）から嘉永七年にかけて建てら



竣工した拝殿

背面側には本殿と那智山青岸渡寺の本堂並んで建っているのを見ることができる。

れたもので、重要文化財に指定され、境内は史跡熊野三山に指定されています。

弊殿の小屋組内で発見した棟札から、昭和九年九月の室戸台風によって社殿をはじめ諸堂ごとく大破したため、境内復興に伴い弊殿祝詞殿廻廊を付設した札殿（拝殿）が建てられ、昭和十六年三月十九日に上棟したことがわかりました。拝殿の小屋組には同時期の大工の墨書もあり、地元（東牟婁郡串本町田原）出身の大工によって建てられたことがわかりました。昭和三十四年六月の屋根葺き替え工事で檜皮から銅板に変えられ、昭和四十七年に庇が設けられ、昭和五十七年に軒唐破風が付加されました。神社では、御創建一七〇〇年記念境内施設整備事業として拝殿・舞殿・幣殿、一の鳥居、二の鳥居、宝物殿、長生殿、祈願所などの修理をおこなっています。

拝殿の銅板が劣化して雨漏りが発生し、向拝の柱や桁が腐食したため早急な修理が必要となりました。向拝は柱・桁を取り替えるために一旦分解して修理しました。同時に銅板屋根の葺き替え、建物全体の塗装・壁や天井の木部補修、閉じられたままの弊殿の扉を開き、授与所の改修・照明設備の整備・空調設備の新設などの整備が行われました。改修の設計は、神社本庁内に事務所を置く日本建築工芸設計事務所が担当し、修理に関する部分は当センターが担当



拝殿内部の工事完了
竣工祭で幣殿の奥の扉をあけた。

しました。複雑化した授与所の屋根の整備は、増築部分だけを整理するように設計担当と協議を行い、昭和十六年建築当初の屋根には手を加えないようにしました。他の部分の修理においても建築当初の札殿部分は将来の文化財指定（登録）を見越して極力手を入れないように努めました。

約一年間、体育館のような素屋根が2棟建ち並び、参拝者や観光客に御迷惑をおかけした修理は、那智山青岸渡寺は昨年一二月に終了し、熊野那智大社の拝殿の修理も四月には完成しました。その他の建物の修理工事は令和二年三月の完成をめざして現在も施工中です。

（寺本 就一）



和田岩坪遺跡の発掘調査

当文化財センターでは、近畿農政局和歌山平野農地防災事業所から委託を受けて、名草排水機場建設工事に先立ち、和田岩坪遺跡の発掘調査を実施しました。調査は、平成30年10月下旬から同31年3月上旬にかけて面積921㎡について実施しました。

和田岩坪遺跡は、和歌山市和田に所在し、和歌山平野の南東部の和田川沿いに位置します。この和歌山平野の南東部には、井辺遺跡・神前遺跡・和田遺跡・和田Ⅱ遺跡・和田岩坪遺跡など多くの遺跡が存在します。

和田岩坪遺跡は、昭和31年の名草川改修に伴う発見に端を発し、昭和56年の駐車場用地造成に伴う小規模な調査があります。

今回の調査では、調査地を東西に分割して行い、西側の調査地からは弥生時代終末期から古墳時代後期にかけて埋まった自然流路（川）を発見し、大量の遺物が出土しました。また、東側の調査地からは、弥生時代前期の土坑や鎌倉時代の屋敷地に伴う

遺構が見つかっています。

西側の調査地

弥生時代終末期から古墳時代後期にかけて埋まった自然流路（川）は、調査地の南側から北方向に延び、幅約18m前後、深さ約1mのものです。自然流路（川）の南側範囲では、東西方向の笹状の木杭列を2列検出しました。自然流路（川）の堆積層からは、弥生時代終末期から古墳時代後期にかけての大量の土器・石器・木質遺物などが出土しています。

東側の調査地

西側の調査地に次いで東側の調査地に入る段階では、西側の自然流路（川）に堆積した弥生時代から古墳時代の遺物に対応する時期の遺構・遺物が数多く存在するので、はと予測していたのですが、予測に反して古墳時代に関するものは僅かしか見つかっていません。

東側の調査地からは、弥生時代前期の墓の可能性がある土坑や溝、鎌倉時代の屋敷

地を区画する堀、土器等の廃棄土坑、溜樹（水を溜める施設）、焼土で埋まった土坑、建物の柱を建てていた柱穴などが見つかっています。

また、西側の自然流路（川）が東側と同じような平坦地になるのが鎌倉時代に入ってからであることも分かってきました。このことは、文献史料等から指摘されている当地域一帯の土地開発の時期と関係しているものと思われる。（土井孝之）



自然流路（川）から見つかった笹状遺構

文化財建造物修理技術者の道具 ⑮ さしがね

大工道具の「さしがね」をご存じでしょうか。曲尺かねじきとも呼ばれるL字型の物差しです。表と裏でそれぞれ異なる目盛せきどめ（表目、裏目）を使って長さや測ったり、直角を調べたり、直線のほか、しならせて曲線を引いたり、勾配こうばいを求めるといった様々な使い方ができます。実測調査の際に重宝している道具ですが、例として作業中特に便利だと感じるのは、円柱の径を測りたい時です。柱を二本のさしがねで挟さんで、その間の距離を見ると、正確な値がすぐに確認できます。私は普段、実測にしか使っていませんが、文化財修理に関わっている大工さんたちは、さしがねの機能を存分に引き出し、使いこなしています。

伝統建築に関わる経験豊富な大工さんは、さしがねを駆使して、軒まわりの建物部材の納まりを正確に出す技術（規矩術）を心得ています。修理の際には、ベニヤ板などに現寸図という実物大の図面を描き、部材がどのように組み合わさり、どこに位置に取りつつかを検討します。そして、原寸で確認した寸法をもとに、軒反りの曲線などを描き入れ、その通りに納まるように木材を加工していきます。

先日、規矩術を使った原寸図製作の研修を受けました。講師の方に指導して頂きながら何とか描き進んだ状態でしたが、軒まわりの納まりがほとんどん具体化していく面白さと、作図の難しさを知りました。今後、関わる建物の規矩を理解し、大工と供に、より良い修理が出来るように努力していきたいと思えます。

（大給 友樹）



さしがねで原寸図を描く

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

埋蔵文化財課 道湯川集落跡

昨年の11月頃から今年の1月まで、県の熊野古道見どころ整備事業に伴い、田辺市中辺路町道湯川で「道湯川集落」という集落跡を発掘調査していました。この集落は、湯川王子と蛇形地蔵との間の熊野古道沿いにあり、中世に日高郡で勢力を誇った湯川一族発祥の地といわれています。文献史料によると、中世にはすでに集落があったようで、上皇や貴族らがそこで宿泊や休憩をしたという記述があります。集落は、昭和31年に最後の住人が去り、廃村になりました。

調査地までは、和歌山市から車で走ること1時間半、舗装もない林道を走ること15分、そこからさらに熊野古道等を歩くこと徒歩5分。昨今では珍しく携帯電話の電波も届かない場所です。調査対象地は、土地境界の石垣に囲まれた周辺に比べやや高台の平地で、敷地内の南西隅には平面形が円形の石組がありました。この円形の石組を私は「井戸」だと思っていて、発掘作業員さんにも井戸と説明していましたが、ある日、旧住民の方の聞き取りをしていたところ、肥溜め、つまりトイレであることが判明しました。これは、これからここを掘ってもらう作業員さんに言いにくい・・・結局、知らぬが仏、最後まで言えませんでした。また、調査地の前の熊野古道を歩く参詣者は、8割以上が外国人なのですが、調査中はよく声をかけていただきました。ある日、年配の外国人女性に「アロー」と声をかけられました。「ハロー」と返しながら、なぜかハワイの挨拶「アロハ」と「ハロー」を混ぜた言葉かと勝手に理解していました。友人に後日そのことを話すと、話しかけてきた彼女はおそらくフランス人で、フランス人は「h」の発音をしないことがあると知りました。当時とっさに言いかけた「ハワイから来られたんですか」という言葉、聞かなくて本当良かったと思っています。思い込みにって本当に怖いですね。

（金澤 舞）



写真1 調査地全景（南から）



写真2 肥溜め（北から）

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2019年春～2019年夏)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 春期企画展「縄文・弥生の『海の道』と『陸の道』～紀伊半島と東西交流～」
2019年 3月23日(土)～5月12日(日)
- 和歌山県内埋蔵文化財調査成果展「紀州のあゆみ～発掘された郷土の歴史～」
2019年 6月1日(土)～6月30日(日)
- 展示講座①(春期企画展)
2019年 4月14日(日) 13:30～15:30
- 展示講座②(紀州のあゆみ展)
2019年 6月16日(日) 13:30～15:30
- 民家ガイド
2019年 4月21日(日) 13:30～15:30
- 古墳ガイドツアー①
2019年 4月27日(土) 13:30～15:30
- おしゃべり考古学①
2019年 5月15日(水) 13:30～15:00
- 館長講座①
2019年 5月18日(土) 13:30～15:00

和歌山県立博物館

- 企画展「国宝・古神宝の世界―熊野速玉大社の名宝―」
2019年 3月9日(土)～4月21日(日)
- 特別展「仏像と神像へのまなざし―守り伝える人々のいとなみ―」
2019年 4月27日(土)～6月2日(日)

和歌山市立博物館

- 企画展「写真にみる和歌山市の歩み 1889-2019」
2019年 4月27日(土)～6月9日(日)

高野山霊宝館

- 冬期平常展「密教の美術」
2019年 1月19日(土)～4月14日(日)
- 春期企画展「高野山と不思議な話」
2019年 4月20日(土)～7月15日(月祝)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙「熊野地方における文化財建造物の修理について」
- 2 特集「熊野地方における文化財建造物の修理について」
- 6 埋蔵文化財課 短信「和田岩坪遺跡の発掘調査」
- 7 きのくに歴史小話「文化財建造物修理技術者の道具⑮ さしがね」
「道湯川集落跡」
- 8 催し物案内



風車86 (2019・春号)

令和元年 5月31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263-1
TEL 073-472-3710
FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp